

与謝野晶子訳

源氏物語 東屋卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

東屋

紫式部

與謝野晶子訳

ありし世の霧来て袖を濡らしけりわり

なけれども宇治近づけば
(晶子)

源右大將は常陸守ひたちのかみの養女に興味は覚えながらも、しいて筑波つくばの

葉山しげやま繁山を分け入るのは軽々しいことと人の批議するのが思わ

れ、自身でも恥ずかしい気のされる家であるために、はばかつて手紙すら送りえずにいた。ただ弁の尼の所からは母の常陸夫人へ、姫君を妻に得たいと薫が熱心^{かおる}に望んでいることをたびたびほめかして来るのであったが、真実の愛が姫に生じていることも想像されず、薫のすぐれた人物であることは聞き知っていて、この縁談の受けられるほどの身の上であつたならと悲観を母はするばかりであつた。

常陸守の子は死んだ夫人ののこしたのも幾人かあり、この夫人の生んだ中にも父親が姫君と言わせて大事にしている娘があつて、それから下にもまだ幼いのまで次々に五、六人はある。上の

娘たちには守^{かみ}が骨を折って婿^{むこ}を選びをし、結婚をさせているが、夫人の連れ子の姫君は別もののように思つて、なんらの愛情も示さず、結婚について考えてやることもしないのを、妻は恨めしがつていて、どうかしてすぐれた良人^{おつと}を持たせ、姫君を幸福な人妻にさせてみたいと明け暮れそれを心がけていた。容貌^{ようぼう}が十人並みのものであつて、平凡な守^{かみ}の娘と混ぜておいてもわからぬほどの人であれば、こんなに自分は見苦しいまでの苦勞はしない、そうした人たちとは別もののように、もつたいない貴女^{きじよ}のふう^{ふう}に成人した姫君であつたから、心苦しい存在なのであると夫人は思つていた。娘がおおぜいいると聞いて、ともかくも世間から公達^{きんだち}と思わ

れている人なども結婚の申し込みに来るのがおおぜいあった。前夫人の生んだ二、三人は皆相当な相手を選んで結婚をさせてしまった今は、自身の姫君のためによい人を選んで結婚をさせるだけだったのであると思い、明け暮れ夫人は姫君を大事にかしずいていた。守も賤しい出身ではなかった。高級役人であつた家の子孫で、親戚も皆よく、財産はすばらしいほど持っていたから自尊心も強く、生活も派手に物好みを尽くしている割合には、荒々しい田舎めいた趣味が混じっていた。若い時分から陸奥などという京からはるかな国に行っていたから、声などもそうした地方の人と同じような訛声の濁りを帯びたものになり、権勢の家に対して

は非常に恭順にして恐れかしこむ態度をとる点などは隙すきのない人間のようでもあった。優美に音楽を愛するようなことには遠く、弓を巧みに引いた。たかが地方官階級だと輕蔑けいべつもせずよい若い女房なども多く仕えていて、それらに美装をさせておくことを怠らないで、腰折歌こしおれうたの会、批判の会、庚申こうしんの夜の催しをし、人を集めて派手はでに見苦しく遊ぶいわゆる風流好きであつたから、求婚者たちは、やれ貴族的であるとか、守の顔だちが上品であるとか、よいふうにはかりしいて言つて出入りしている中に、左近衛少将さこんえで年は二十二、三くらい、性質は落ち着いていて、学問はできると人から認められている男であつても、格別目だつ才氣も持たない

せいで、第一の結婚にも破れたのが、ねんごろに申し込んで来ていた。常陸夫人は多くの求婚者の中でこれは人物に欠点が少ない、結婚すれば不幸な娘によく同情もするであろう、風采も上品である、これ以上の貴族は、どんなに富に寄りつく人は多いとしても、地方官の家へ縁組みを求めるはずはないのであるからと思いい、姫君のほうへその手紙などは取り次いで、返事をするほうがよいと認める時には、書くことを教えて書かせなどしていた。夫人はひとりぎめをして、守は愛さないでも自分は姫君の婿を命がけで大事にしてみせる、姫君の美しい容姿を知ったなら、どんな人であつても愛せずにはおられまいと思ひ立って、八月ぐらゐと

仲人^{なこうど}と約束をし、手道具の新調をさせ、遊戯用の器具なども特に美しく作らせ、巻き絵、螺鈿^{らでん}の仕上りのよいのは皆姫君の物として別に隠して、できの悪いのを守の娘の物にきめて良人^{おっと}に見せるのであったが、守は何の識別もできる男でなかったからそれで済んだ。座敷の飾りになるという物はどれもこれも買い入れて、秘蔵娘の居間はそれらでいっぱい、わずかに目をすきから出して外がうかがえるくらいにも手道具を並べ立て、琴や琵琶の稽古^{けいこ}をさせるために、御所の内教坊^{ないきょうぼう}辺の楽師を迎えて師匠にさせていた。曲の中の一つの手事が弾^ひけたといつては、師匠に拝礼もせんばかりに守は喜んで、その人を贈り物でうずめるほどな大騒ぎを

した。派手^{はで}に聞こえる曲などを教えて、師匠が教え子と合奏をしている時には涙まで流して感激する。荒々しい心にもさすがに音楽はいいものであると知っているであろう。こんなことを少し物を識^しった女である夫人は見苦しがって、冷淡に見ていることで守は腹をたてて、俺^{わし}の秘蔵子をほかの娘ほどに愛さないとよく恨んだ。

八月にと仲人から通じられていた左近少将はやつとその月が近づくと、同じことなら月の初めにと催促をして来た時、守の実の子でなく、母である自分一人が万事氣をもんできた娘であることを言い、その真相を前に明らかにしておかねば婿になる人は、そ

んなことでのちに失望をすることがあるかもしれぬと思い、夫人は初めから仲へ立っていたその男を近くへ呼んで、

「今度お相手に選んでくださいました子につきましては、いろいろ遠慮がありましたね、こちらからお話を進める心はなかったのですが、前々からおっしゃってくださいますのを、先が並み並みの方でもいらっしやらないためにもつたいなくお気の毒に思われまして、お取り決めしたのですが、お父様の今ではない方なのですから、私一人で仕度したくをしていまして、そんなことで不都合だらけでお気に入らぬことはないかと今から心配をしています。娘は何人もありますが、保護者の父親てておやのあります子は、そのほうで心

配をしてくれますことと安心して、この方の身の納まりだけを私はいろいろと苦勞にして考えて、たくさんの若い方をそれとなく觀察していたのですが、不安に思われることがどこかにある方ばかりで、結婚にまで話を進められませんでしたのに、少将さんは同情心に厚い性質だと伺いまして、こちらの資格の欠けたのも忘れてお約束をするまでになったのですが、私の大事な方を愛してくださらないようなことが起こり、世間体までも悪くなることがあつては悲しいだろうと思われます」

と語った。

仲介者はさつそく少将の所へ行つて、常陸夫人の言葉を伝え

た。すると少将の機嫌きげんは見る見る悪くなった。

「初めから実子でないという話は少しも聞かなかったじゃないか。同じようなものだけれど、人間きも一段劣る気がするし、出入りするにも家の人に好意を持たれることが少ないだろう。君はよくも聞かないでいいかげんなことを取り次いだものだね」

と少将が言うので仲人はかわいそうになり、

「私はもとよりくわしいことは知らなかったのですよ。あの家の内部に身内の者がいるものですから話をお取り次ぎしたのです。何人の中で最も大切にかしずいている娘とだけ聞いていましたから、守の子だろうと信じてしまったのですよ。奥さんの連れ子

があるなどとは少しも知りませんでした。容貌ようぼうも性質もすぐれて

いること、奥さんが非常に愛していて、名誉な結婚をさせようと
大事がっけいられることなどを聞いたものですから、あなたが常
陸家に結婚を申し込むのによいつてがないかと言っけいらっしや
るのを聞いて、私にはそうしたちよつとした便宜がありますとお
話したのが初めです。決していいかげんなことを言つたのでは
ありませんよ。それは濡衣ぬれぎぬというものです」

意地が悪くて多弁な男であつたから、こんなふう息まいてく
るのを聞いていて、少将は上品でない表情を見せて言うのだつ
た。

「地方官階級の家と縁組みをすることなどは人がよく言うことではないのだが、現代では貴族の媚をあがめて、後援をよくしてくれ
ることに見栄みえの悪さを我慢する人もあるようになったのだから
ね。どうせ同じようなものだとしても、世間には、わざわざ継娘まま
の媚にまでなってあの家の余沢をこうむりたがったように見える
からね。源少納言や讃岐守さぬきのかみは得意顔で出入りするであろうが、こ
ちらはあまり好意を持たれない媚で通って行くのもみじめなもの
だよ」

仲人なこうどは追従男で、利己心の強い性質から、少将のためにも、自
身のためにも都合よく話を変えさせようと思った。

「守の実の娘がお望みでしたら、まだ若過ぎるようでも、そう話をしてみましようか。何人の中で姫君と言わせている守の秘蔵娘があるそうです」

「しかしだね、初めから申し込んでいた相手をすっぱかして、もう一人の娘に求婚をするのも見苦しいじゃないか。けれど私は初めからあの守の人物がりっぱだから感心して、後援者になってほしくて考えついた話なのだ。私は少しも美人を妻にしたいと思つてはいないよ。貴族の家の艶えんな娘がほしければたやすく得られることも知っているのだ。しかし貧しくて風雅な生活を楽しもうとする人間が、しまいには墮落した行為もすることになり、人から

人とも思われないうになつていくのを見ると、少々人にはそし譏られても物質的に恵まれた生活がしたくなる。守に君からその話を伝えてくれて、相談に乗ってくれそうなら、何もそう義理にこだわっている必要もまたないのだ」

少将はこう言った。仲人は妹が常陸家のままこ継子の姫君の女房をしている関係で、恋の手紙なども取り次がせ始めたのであったが、守に直接逢あつたこともないのだった。

仲人はあつかましく守の住居すまいのほうへ行つて、

「申し上げたいことがあつて伺いました」

と取り次がせた。守は自分の家へ時々出入りするとは聞いてい

るが、前へ呼んだこともない男が、何の話をしようとするのである
ろうと、荒々しい不機嫌ふきげんな様子を見せたが、

「左近少将さんからのお話を取り次ぎますために」

と男が言わせたので逢った。仲人は取りつきにくく思うふうで
近くへ寄って、

「少将さんは幾月か前から奥さんに、お嬢さんとの御結婚の話で
おたよりをしておいになったのですが、お許しになりました、
今月と言ってくださったものですから、吉日を選んでおいでに
なりますうちに、そのお嬢さんは奥さんのお子さんであつても常
陸守さんのお嬢さんでない、公達きんだちが婿におなりになつては、世間

でただ物持ちの余慶をこうむりたいだけで結婚したと悪くばかり言われるでしょう。地方官の婿になる人は私の主君のように大事がられて、手に載せるばかりにされるのを望んで縁組みをする人たちがあのに、さすがにその望みも貫徹されず、あまり好意をも持たれぬ一段劣った婿で出入りをされるのはよろしくないとまあこんなふうな忠告がある人がしたのだそうです。それはその人だけでなく何人ともなく皆同じことを言ったそうで、少将さんは今どうすればいいかと煩悶はんもんをしておられます。初めから自分は実力のある後援者を得たいと思って、それに最も適した方として選んだ家なのだ。実子でないお嬢さんがあるなどとは少しも知らな

かったのだから、初めからの志望どおりに、まだ年のお若い方が
幾人かいらっしやるそうだから、そのお一人との結婚のお許しが
得られたらうれしいだろう、この話を申し上げて思召しおほしめを伺って
来いと申されたものですから」

などと言った。常陸守は、

「そんな話の進行していたことなどを私はくわしく知りませんでした。
私としては実子と同じようにしてやらなければならぬ人
なのですが、つまらぬ子供もおおぜいいるものですから、意気地いけぢ
のない私は力いっぱいその者らの世話にかかっていますと、家
内は自身の娘だけを分け隔てをして愛さないと意地悪く言ったり

したことがありますて、私にいつさい口を入れさせなくなった人のことですから、ほのかに少将さんからお手紙が来るということだけは聞いていたのですが、私を信頼してくだすつての思召しとは知りませんでした。それは非常にうれしいお話です。私の特別かわいく思う女の子があります。おおぜいの子供の中に、その子だけは命に代えたいほどに愛されます。申し込まれる方はいろいろありますが、現代の人は皆移り気なふうになっていますから、娘に苦勞をさせたくない心から、まだ相手をよう決めずにいます。どうかして不安の伴わない結婚をさせたいと、毎日そればかりを思っていました。が、少将様におかせられては、御尊父様の

故大將様にも若くからおそば近くまいっていた縁もありまして、身内の者としてお小さい時からおりこうなお生まれを知っておりましたから、今もお邸^{やしき}へ伺候もしたく思いながら、続いて遠国に暮らすことになりました。京にいますうちは何をいたすもおつくうで参候も実行できませんでしたような私へ、ありがとうございます。お申し込みをしてくださいましたことは返す返す恐縮されます。仰せどおり娘を差し上げますのはたやすいことですが、今までの計画を無視されたように思つて家内から恨まれるという点で少しはばかられます」

とこまごまと述べた。さいさきがよさそうであると仲人^{なこうど}はうれ

しく思った。

「そんなことまでもお考えになる必要はございませんでしょう。少将さんのお心は、お母様はとにかく、お嬢さんのお父様お一人のお許しが得たいと願っていらっしゃるのでして、お年は若くても御実子のお嬢様で、たいせつにあそばしていらっしゃる方と御結婚の御同意が得られますことで十分満足されることでしよう。御実子でない方と連れ添って、まがい物の婿のようになることはしたくないと仰せになりました。人物はまことにごりっぱで、世間の評判もたいした方ですよ。若い公達きんだちといいましても、あの方だけは女に取り入ろうと氣どることなどはなさらない。下情にも

よく通じておられます。領地は何か所もありになるのですよ。
現在の御収入は少ないようでも、貴族は家についた勢いというものが
あるのですから、ただの人の物持ちになっていばっているの
などその比じゃありませんとも。来年は必ず四位し いにおなりになる
でしょう。この次の蔵人頭くらうどの かみはまちがいなくあの方にあたると帝みかどが
御自身でお約束になったんですよ。何の欠け目もない青年朝臣あそんで
いて妻をまだ定めきないのはどうしたことだ、しかるべく選定して
後見の舅しゅうとを定めるがいい。自分がいる以上高級官吏には今日明日
にでも上げてやろうとそう帝は仰せになるのですよ。だれよりも
いちばん帝の御信任を受けていられるのはあの少将さんなのです

よ。実際御性格だつてすぐれた重々しい人ですよ。理想的な婿君ではありませんか。幸いあちらからお話があるので、この場合にぐずぐずしていずに話をお定めになるのが上策でしょう。

実際あちらには縁談が降るほどあるのですからね。あなたの躊躇ちゅうちゅうして渋っておられるのが知れましたら、ほかの口の話をお定めになるでしょう。私はただあなたのためにこの御良縁をお勧めするのですよ」

仲人が出まかせなよいことずくめを言い続けるのを、驚くほど田舎めいた心になつてゐる守であつたから、うれしそうに笑顔えがおをして聞いていた。

「現在の御収入の少ないことなどはお話しになる要はない。私が控えている以上は、頭の上へまでもささげて大事にしますよ。決して足らぬ思いはさせません。いつまでもお尽くしすることができずに途中で私が亡^なくなることがあっても、遺産の領地は一つだってあの娘以外に与えるものではありませんから、御安心ください。すっていいのです。子供はおおぜいおりますが、あの娘にだけ私は特別な愛情を持っているのです。真心をもって愛してください。方であれば、大臣の位置を得たく思いになり、うんと運動費を使いたくおなりになった時にも事は欠かせますまい。現在の帝がそれほど愛護される方では、もうそれで十分で、私などが手を出す

必要もないくらいのものでしょう。帝の御後見以外のものは少将さんのためにも私の女の子のためにもたいした結果になりますまい」

守^{かみ}がおおげさに承諾の意を表したために、仲人はうれしくなつて、妹にこの事情も語らず、夫人のほうへも寄つて行かずに歸り、仲人は守^{かみ}の言ったことを、幸福そのものをもたらしただうにして少将へ報告した。少将は心に少し田舎^{いなかもの}者らしいことを言うとは思つたが、うれしくないこともなさそうな表情をして聞いていた。大臣になる運動費でも出そうと言つただけはあまりな妄想^{もうそう}であるとおかしかった。

「それについて奥さんのほうへは話して来たかね。奥さんの考えていた人と別な人と結婚をしようというのだからね。私の利己主義からそうなったなどと中傷をする人もあるだろうから、このことはどんなものだからね」

少し躊躇^{ちゅうちゅう}するふうを見せるのを仲人は皆まで言わせずに、

「そんな御心配は無用です。奥さんだって今度のお嬢さんを大事にしておられるのですからね。ただいちばん年長の娘さんで、婚期も過ぎそうになっている点で、前の方のことを心配して、そちらへ話をお取り次ぎになっただけのものですよ」

と言うのであった。今まではその人のことを特別に大事にして

いる娘であると言っていた同じ男の口から、にわかにかう言われるのを信じてよいかわからぬとは少将も思ったが、やはり利己的な考えが勝ちを占めて、一度は恨めしがられ、誹謗ひぼうはされても、一生楽々と暮らしうることは願わしいと処世法の要領を得た男であつたから、決心をして、夫人と約束をした日どりまでも変えずにその夜から常陸守ひたちのかみの娘の所へ通い始めることにした。

夫人は良人おっとにも言わず一人で姫君の結婚の仕度したくをして、女房の服装を調べさせ、座敷の中などを品よく飾り、姫君には髪を洗わせ、化粧をさせてみると、少将などというほどの男の妻にするのは惜しいようで、憐むべき人あわれである、父宮に子と認められて成長

していたなら、たとえ宮のお亡かくれになったあとでも、源大将などの申し込みは晴れがましいことにもせよ、受け入れなくもなかったはずである、しかしながら自分の心だけではこうも思うものの、ほかから見れば守の子同然に思うことであろうし、また真相を知っても私生児と見てかえって輕蔑けいべつするであろうことが悲しいなどと夫人は思い続けていた。どうすればいいのであろう、婚期の過ぎてしまうことも幸福でない、家柄のよい無事な男が今度のように懇切に言って来たのであるから与えるほうがいいのであるうかなどと、結局そのほうへ心が傾いたというのも、仲人が守へ言っただと同じようなよいことずくめの話に、まして女の人はやす

やすと欺あざむかれたからであるかもしれぬ。もう明日あすか明後日あさってになつたかと思うと、心が落ち着かず忙がしく、どこにもひとところにじつとしておられず夫人がいらいらとしている所へ、外から守がはいって来て、長々と雄弁に次のようなことを言つた。

「私を除のけ者にしておいて、私の大事な娘の求婚者を自分の子のほうへ取ろうとあなたはしたのか、ばかばかしく幼稚な話だ。あなたのにっばな娘さんを入り用だと思ふ公達きんだちはなさそうだね。卑賤な私風情ふぜいの女の子をぜひ妻にと言つてくださるので、うまく計画をしたつもりだろうが、それは初めの精神と違ふと言つてほかの縁談を定めきようとされていたから、それなら思召しどおりこち

らの子のほうにと言つて私は定めてしまった」

何の思いやりもなく守はこの奇怪な報告を得意になつて妻へした。夫人はあきれてものも言われない。そんなことであつたかと思つと、人生の情けなさが一時に胸へせき上がつてきて涙が落ちそうにまでなつたから、静かに立つて歩み去つた。姫君の所へ行つてみると、可憐かれんな美しい姿でその人はすわつていた。夫人はなんとなく安心を覚えた。どんな運命がここに現われてきても、この人がだれよりも不遇で置かれるはずはないと思われるのである。姫君の乳母めのとを相手に夫人は、

「いやなものは人の心だね。私は同じようにだれも娘と思つて世

話をしているものの、この方と縁を結ぶ人には命までも譲りたい
気でいるのだのに、父親がないと聞いて、けいべつ軽蔑をして、まだ年の
ゆかない、でき上がっていない子などを、この方をさしおいてめと娶
るというようなことができるものなんだねえ。そんな人をまた婿
にすることなどは絶対にもう私はいやだけれど、守が名誉に思っ
て大騒ぎしているのを見ると、それがちょうど似合いのむじゆうと婿舅だと
思われるよ。私はいっさい口を入れないつもりよ。私はこの家で
ない所へ当分行っていたい」

こう歎きながら言うのであった。乳母も腹がたってならない。
姫君が軽蔑されたと思うからである。

「いいですよ奥様。これも結局お姫様の御運が強かったから、あの人と結婚をなさらないで済むことになったのですよ。そんな人にはこの方の価値ねうちはわかりますまい。お姫様はものの理解の正しい同情心の厚い方にお嫁とっがせいたしとうございます。源右大將様の御風采ふうさいをほのかにしか拝見いたしませんでしたが、まるで命も延びそうな気がいたしましたよ。親切なお申し込みもあるので、すから、御運に任せてあの方を婿君になさいましょ」

「まあ恐ろしい。人の話に聞くと、長い間すぐれた女性とでなければ結婚をしないとお願いになって、左大臣、按察使大納言あぜち、式部卿しきよの宮様などから婿君にといつて懇望されていらっしやったの

を無視しておいになったあとで帝の御秘蔵の宮様を奥様におも
らいになった方だもの、どんなにすぐれたように見える人だつて
ほんとうに愛してくださるものかね。あのお母様の尼宮の女房に
して時々は愛してやろうとは思つてくださるだろうがね。それは
ごりっぱな所だけれど、そんな関係に置かれているのは苦しいも
のだからね。二条の院の奥様を幸福な方だと人は申しているけれ
ど、やはり物思いのやむ間もないふうでおありになるのを見る
と、どんな人でもいいから唯一の妻として愛してくださる良人おっとよ
りほかは頼もしいものがないことは私自身の経験でも知ってい
る。お亡なくなりになった八の宮様は情味のある方らしく見えて、

美男で艶えんなお姿はしていらしたけれど、私を軽いものとして扱あいになったのが、どんなに情けなく恨めしかったことだったろう。守は言語道断な情味の欠けた醜い人だけれど、私を一人の妻としてほかにはだれも愛していないことで、私は絶対な安心が得られて今日まで来ましたよ。何かの時に今度のような、ぶしつけな、愛想あいそうのないことをするのはしかたがないがね、物思いをさせられたり、嫉妬しつとを覚えさせられたりすることもなく、よく双方で口喧嘩くちげんかはしても、しかたのないと思うことは、またよくあきらめてしまうのが私ら夫婦なのだ。高級のお役人、親王様と言われ、優美に、高雅な生活をしていらっしやる方を対象としていて

も、こちらに資格がなくてはつまらないものよ。すべてのことは自身の世間的価値によって定まることなのだと思うと、この方がどこまでもかわいそうに思われるがね、どうかして人笑いにならない幸福な結婚をさせたいと思う」

二人は姫君の将来のことをいろいろと相談し合った。

守は婿取りの仕度したくを一所懸命かみにして、

「女房などはこちらにいいのがたくさんあるようだから、当分あちらの娘付きにさせておくがいい。帳台の帛きれなども新調しただろう、にわかなことで間に合わないから、それをそのまま用いることにして、こちらの座敷を使おう」

西座敷のほうへもそんなことを言いに来て、大騒ぎに騒いでいた。夫人が感じよくさっぱりと装飾しておいた姫君の座敷へ、よけいに幾つもの屏風びょうぶを持って来て立て、飾り棚だな、二階棚なども気持の悪いほど並べ、そんなのを標準にしてすべての用意のとのえられているのを、夫人は見苦しく思うのであるが、いっさい口出しをすまいと言い切ったのであったから、傍観しているばかりであった。姫君は北側の座敷へ移っていた。

「あなたの心は皆わかってしまった。同じあなたの子なのだから、どんなに愛に厚薄はあっても、今度のような場合に打ちやりにしておけるものでないだろうと思っていたのはまちがいだっ

た。もういいよ。世間には母親のある子ばかりではないのだから」

と守は言い、愛嬢を昼から乳母めのとと二人で撫なでるようにして繕い立てていたから、そう醜いふうの娘とは見えなかった。今が十五、六で、背丈せたけが低く肥ふとった、きれいな髪かみの持ち主で、小桂こうちぎの丈たけと同じほどの髪かみのすそはふさやかであつた。その髪かみをことさら賞美して撫でまわしている守であつた。

「家内がほかの計画を立てていた人をわざわざ実子の婿にせずともいいとは思つたが、あまりに人物がりっぱなもので、われもわれもと婿に取りたがるというのを聞いて、よそへ取られてしまう

のは残念だったから」

と、あの仲人なこうどの口車に乗せられた守の言っているのも愚かしい限りであつた。

左近少将もこの派手はでな舅しゅうとぶりに満足して、夫人のほうもやむをえず同意したとと解釈をし、以前に約束のしてあつた夜から来始めた。守の妻と姫君の乳母はあさましくこれをながめていたのであつた。ひがんだようには見られまいと夫人は世話に手を貸そうとも思っていたが、それをするのも気が進まないままに、二条の院の中の君へまず手紙を送ることにした。

用事がございませんで手紙を差し上げますのもなれなれしくい

たしすぎることになり、失礼かと存じまして、御機嫌ごきげんはどうかと始終氣にいたしながらお尋ねも申し上げませんでした。あの方に謹慎の日がまわってまいりまして、しばらくどこかへ所を変えさせたいと思うのですが、そっとおそばへまいらせていただいてはどんなものでしょう。人目につかぬお部屋やが拝借できますれば非常にうれしいことと存じます。つまりぬ私には十分の保護もできませんで、あの方を苦しい立場に置きますことのしばしばある悲しい世でございますのに、お助け所と考えられますのはまずあなた様だけでございます。泣きながら書かれたものであるこの手紙を、中の君は哀れと

思つたが、父宮が、あくまで子とあそばさなかつた人を、父や姉の異議の聞きようのない世になつて、自分が姉妹きょうだいとしてつきあうのも気のとがめることであるが、また自分がかまわずにおいた結果、低い女房勤めなどをするようになることも心苦しいことに思われるであろう、自分の計らい方一つから姉妹がちりぢりになつてしまうことも父宮のためにお気の毒なことであると思ひ悩まれるのであつた。常陸夫人ひたちは大輔たゆうのところへも姫君についての心苦しさをやや強く書いて言つて来たのであつたから、

「何かわけがあることでございましょう。冷淡に断わつておしまいになつてはいけません。ああした劣つた人から生まれた方が姉きょう

妹だいの中に混じっておいでになることは、どこにも例のあることでございます。先方が無情だと思えますような処置をおとりになつてはなりません」

などと夫人に取りなして、

それではお居間から西のほうに目だたぬ場所をこしらえましたから、いいお座敷ではありませんがごしんぼうをなさいますならしばらくお預かりになろうとおっしゃいます。

と昔の朋輩ほうばいの中將へ返事をした。その人はうれしく思つてさっそく姫君を二条の院の夫人へ預ける決心をした。姫君も姉君と親しみたくてならぬ心であつたから、かえつて少將の問題が機会を

作つたのを喜んだ。

常陸守は婿の少将の三日の夜の儀式をどんなふう^{はで}に派手に行な
おうかと思案をしたのであるが、高尚^{こうしよう}なことは何もわからぬ男で
あつたから、ただ荒い東国産の絹を無数に投げ出し、酒肴^{しゅこう}も座が
狭くなるほどにも運び出すような歓待^{もてなし}ぶりをしたのを、卑しい従
者らは大恩恵に逢^あつたように思つて喜んだから、主人の少将も
けつこうなことに思い、りこう^{しゅうこう}な舅の持ち方をしたと喜んだ。常
陸夫人はこの儀式のある間は外へ出て行くのも意地の悪いことに
思われるであろうと我慢をして、ただ父親がするままを見てい
た。婿君の昼の座敷、侍の詰め所というような室^{へや}を幾つも用意す

るために、家は広いのであるが、長女の婿の源少納言が東の対^{たい}を
使っていたし、そのほかに男の子も多いのであるから空室^{あきま}もなく
なった。今まで姫君のいた座敷へ四日めからは婿が住み着くこと
になっ^ていては、廊座敷などという軽々しい所へ姫君を置くのは
どうしても哀れでしんぼうのならぬことと夫人に思われて、考え
あぐんだ末に中の君へ預けようとしたのである。だれもが八の宮
の三女として姫君を見ないところから、私生児として軽蔑^{けいべつ}するの
であろうと思ひ、お認めにならなかつた宮の御娘の女王^{にょおう}の所を選
んでしいて姫君の隠れ場所にしたのであつた。

姫君には乳母^{めのと}と若い女房二、三人がついて来た。西向きの座敷

の北にあたった所を部屋に与えられた。長い間遠く離れていた間柄ではあるが、母方の血縁のある常陸夫人であつたから、来た時には中の君も他人扱いにはせず、顔を見せずに隠れて話すようなこともせず、親王夫人らしい気品を持って、若君の世話などをする様子も近く見せられるのを、わが娘に比べて常陸夫人がうらやましく思うのも哀れである。自分も八の宮夫人と家柄の懸隔のあるわけではない、叔母^{おば}と姪^{めい}だつたのではないか、女房になつて仕えていたという点で、自分の生んだ姫君は宮の女王の一人に数えられず私生児として今度のように、露骨に人から軽侮の態度をとられることにもなつたと思う心から、こんなふうにして親しみ

寄ろうとするのも悲しい心である。

その一室には物忌ものいみという札が貼はられ、だれも出入りをしなかった。常陸夫人も二、三日姫君に添ってそこにいた。以前の訪問の時と違い、今度はこんなふうでゆるりと二条の院の生活を昔の中將は観察することができた。

兵部卿ひょうぶきやうの宮が二条の院へおいでになった。好奇心から常陸夫人は物の間からのぞいて見るのであったが、宮は非常にお美しくて、折った桜の枝のような風采ふうさいをしておいでになった。自身が信賴くわいして、強情きやうじやうで恨めしいところはあるけれども、機嫌きげんをそこねまいとしている常陸守よりも姿も身分もずっとすぐれたような四位や五

位の役人が皆おそばに来てひざまずいて、いろいろなことを申し上げたり、御意を伺ったりしていた。また年若な五位などで、この夫人にはだれとも顔のわからぬお供も多かった。自身の継子の式部丞しきぶのじょうで蔵人くらうどを兼ねている男が御所の御使みつかいになって来た。こんな役を勤めながらも、おそば近くへはよう来ない。あまりにも普通人と懸隔のある高貴さに驚いて、これは人間世界のほかから降くだっておいでになった方ではないかという気が常陸の妻にはされた。こんな方に連れ添っておいでになる中の君は幸福であると思つた。ただ話で聞いているは、どんなりっぱな方でも女に物思ものしいをおさせになつてはよろしくないと、憎いような想像をしてい

た自分は誤りであつた、このお美しい風采ふうさいを見れば、七夕たなばたのよう
に年に一度だけ来る良人おとこであつても女は幸福に思わなくてはなら
ないなどと思つている時、宮は若君を抱いてあやしておいでに
なつた。夫人は短い几帳きちようを間に置いてすわっていたが、その隔て
の几帳を横へ押しやつて話などを宮はしておいでになるのであ
る。またもない似合わしい美貌びぼうの御夫婦であるに見えるのであつ
た。八の宮の豊かでありにならなかつた御生活ぶりに比べて思
うと、同じ親王と申し上げても恵まれぬ方、恵まれた方の隔たり
はこれほどもあるものかという気のする常陸夫人だつた。几帳の
中へおはいりになつたあとでは乳母めのとなどと若君のお相手をしてい

た。伺候した者の集まってきたことが時々申し上げられても、疲れていて気分がよろしくないと仰せになって、夫人の室から宮はお出にならなかった。お食膳しよくぜんがこちらの室へ運ばれて来た。すべてのことが気高く高雅であつた。自身が姫君の生活に善美を尽くしていると信じていたことも、比較して見ていた目は地方官階級の趣味にほかならなかったと常陸夫人は思うようになった。自分の姫君もこうした親王とお並べしても不似合でない容姿を備えていると思われる。財力を頼みにして父親がお后きごきにもさせようと願っている娘たちは、同じわが子であつても全然そうした美の備わっていないことを思うと、これからは姫君の良人を謙

遜^{そん}して選ぶ必要はない、自重心を持たなければならぬと一晩じゅういろいろな空想を常陸夫人はし続けた。

朝おそくなつてから宮はお起きになり、病身になつておいでになる中宮^{ちゅうぐう}がまた少しお悪いとお聞きになつて御所へまいろうとされ、衣服を改めなどしておいでになつた。心が惹^ひかれてまた常陸夫人がのぞくと、正しく装束をされたお姿はまた似るものもないほど気高くお美しい宮は、若君へお心が残るようにいろいろとあやしておいでになる。粥^{かゆ}、強飯^{こわいい}などを召し上がり、この西の対からお車に召されるのであつた。今朝^{けさ}からまいって控え所のほうにいた人々はこの時になつてお縁側へ出て来て何かと御挨拶^{あいさつ}を

申し上げたりしている中に、氣どったふうを見せながら平凡でもしろみのない顔をし、直衣のうしに太刀たちを佩はいているのがあった。宮のおいでになる前では目にもとまらぬ男であつたが、

「あれがあゝの常陸守の婿の少将じゃありませんか。初めはあゝの姫君の婿にと定められていたのに、守かみの娘をもらつてかばつてもらおうという腹で、女にもでき上がっていない子供を細君にしたのですよ。そんなことをこちらなどで噂うわさする者はありませんがね、守の邸やしきに知った人があつて私はその事情を知っているのですよ」

とほかの一人にささやいている女房があつた。常陸の妻が聞いているとは知らずにこんなことの言われているのにもその人は

はつとして、少将を相当な風采ふうさいをした男と認めた以前の自身すらも、残念に腹だたく、あの男と結婚をさせれば姫君の一生は平凡なものになってしまふのであつたと思い、あれ以来輕蔑はしてゐるのであつたが、いっそうその感を深くする常陸の妻であつた。若君が這はい出して御簾みすの端からのぞいているのに宮はお気づきになつて、またもどつておいでになつた。

「中宮様の御気分がよろしいようだったら早く退出して来よう。まだお苦しいふうな御容体だったら今夜は宿直とのいしよう。この人がいては一晩でもほかにいる間は気がかりで苦しくてならない」

こう女房へお言いになりながらしばらく若君をお慰めになつて

から出てお行きになる宮の御様子は見ても見ても飽くことのない
ほどお美しかったのが、行っておしまいになったあとに物足りな
さと寂しさを常陸夫人は感じた。

昔の中将が言葉を尽くして宮の御容姿をほめたたえているのを
聞いていて、夫人はこの人も田舎いなかびたものであると思って笑って
いた。

「奥様にお別れになりましたのはお生まれになったばかりでござ
いましたから、どうおなりあそばすことかとわれわれも不安でな
りませんでしたし、宮様も御心配あそばしたものでございます
が、あなた様は御幸運を持ってお生まれになったものですから、

宇治のような山ふところでごりっぱにお育ちになったのでございます。ほんとうに残念でございます。大姫君のお亡れかくになりましたことはあきらめきれません」

などと泣きながら常陸の妻は言う。中の君も泣いていた。

「人生が恨めしくばかり思われて心細い時にも、また生きていれば少し慰みになる時もあった、そんなおりおりに、生まれた時にお別れしたお母様のことは、そうした運命だったのだからと、お顔を知らないのだからあきらめはつくのだけれど、お姉様のことはいつも生きていくだすったらと思われて悲しいのですよ。大将さんが今でもまだどんなことにも心の慰められることがないと

お悲しみになるほどの、深い愛をお姉様に持っておいでになったことがわかると、いっそうお死になつたのが残念でね」

と中の君は言った。

「大將様はあんなに、例ためしもないほど婿君として帝みかどがお大事にあそばすために、御驕慢きやうまんになつてそんなふうなこともお言いになるのではありませんすまいか。大姫君が生きておいでになつても、そのために宮様との御結婚をお断わりあそばすとも思われませんもの」

「まあお姉様だって、だれもが逢あっているような悲しい目は見ていらつしやるだろうからね。かえって先にお死になつてよかったかもしれない。すべてを見てしまわないためによい想像ばかり

をしておられるようなものだと思うけれどね。でもね大將はどういう宿縁があるのか怪しいほど昔の恋を忘れずにおいでになってね、お父様の後世ごせのことまでもよく心配してくだすって仏事などもよく親切に御自身の手でしてくださるのですよ」

と中の君は、感謝している心を別段誇張もせず常陸夫人へ語って聞かせた。

「お亡かくれになった姫君の代わりにほしいと、物の数でもございません方のことさえも宇治の弁の尼からお言わせになりましたでございます。私はそんなだいそれたことは考えもいたしません『紫の一本ひともとゆゑに』（むさし野の草は皆がら哀れとぞ思ふ）と申しま

すように、大姫君の妹様というだけでお思いになるのかとおそれ
おおい申しようですが、哀れに思われますほどの真心な恋をな
すったのでございますね」

などと常陸夫人は話したついでに、姫君を将来どう取り扱って
いいかと煩悶はんもんしているということを泣く泣く中の君へ訴えた。細
かに言ったのではないが、二条の院の女房らの間にまで噂うわさをされ
るようになっていることであるからと思い、左近少将が軽蔑けいべつした
ことなどをほのめかして言った。

「私の命のございます間は、ただお顔を見るだけを朝夕の慰めに
して、そばでお暮らしさせるつもりでございますが、死にました

あとは不幸な女になって世の中へ出て苦勞をおさせすることになるかと思ひますのが悲しくて、いっそ尼にして深い山へお住ませすることにすれば、人生への慾よくは忘れてしまふことになってよろしかろうなどと、考えあぐんでは思ひついたりもいたします」

「ほんとうに氣の毒なことだけれどそれは一人だけのことでなく父を亡なくした人は皆そうよ。それに女は独身で置いてくれないのが世の中の慣ならいで一生一人でいるようにとお父様が定きめておいでになった私でさえ、自分の意志でなしにこうして人妻になつてゐるのだから、まして無理なことですよ。尼にさせることもあまりにきれいで惜しい人ですよ」

中の君が姉らしくこう言うのを聞いて常陸夫人は喜んでいた。^{ひたち}
年はいっているがりっぱできれいな顔の女であった。肥り過ぎた^{ふと}
ところは常陸さんと言われるのになつていた。

「お亡くなりになりました宮様が子としてお認めくださらなかつ
たために、みじめな方はいっそうみじめなものになつて、人から
もお侮^{めなご}られになると悲しがっておりましたが、あなた様へお近づ
きいたしますのをお許しくださいませして、御親切な身のふり方ま
で御心配くださいますことで、昔の宮様のお恨めしさも慰められ
ます」

そのあとで常陸さんはあちらこちらと伴われて行つた良人^{おとこ}の任

国の話をし、陸奥^{むつ}の浮嶋^{うきしま}の身にしむ景色^{けしき}なども聞かせた。

「あの『わが身一つのうきからに』（なべての世をも恨みつるかな）というふうに悲しんでばかりいました常陸時代のことと詳しくお話し申し上げることもいたしまして、始終おそばにまいっていたい心になりましたけれど、家^{うち}のほうではわんぱくな子供たちのおおぜいが、私のおりませんのを寂しがって騒いでいることかと思ひますと、さすがに気が落ち着きません。ああした階級の家へはいってしまいましたことで、私自身も情けなく思うことが多いのでございますから、この方だけはあなた様^{おほしめ}の思召^{おもひめ}しにお任せいたしますから、どうとも将来のことをお定め^きくださいまし」

この常陸夫人の頼みを聞いて、中の君も、この人の言うとおり妹は地方官級の人の妻などにさせたくないと思っていた。姫君は容貌ようぼうといい、性質といい憎むことのできぬ可憐かれんな人であつた。ひどく恥ずかしがるふうも見せず、感じよく少女らしくはあるが機き智ちの影が見えなくはない。夫人の居室に侍している女房たちに見られぬように、上手じょうずに顔の隠れるようにしてすわっていた。ものの言いようなども総角あげまきの姫君に怪しいまでよく似ているのであつた。あの人型ひとがたがほしいと言つた人に与えたいとその人のことが中の君の心に浮かんだちようどその時に、右大将の到来を人が知らせに來た。居室にいた女房たちはいつものように几帳きちようの垂たれ絹を

引き直などして用意をした。姫君の母は、

「では私ものぞかせていただきましょう。少しお見かけしただけの人が、たいへんにおほめしていただきましたけれど、こちらの宮様のお姿とは比較すべきではございますまい」

と言っていたが、女房たちは、

「さあ、どうでしょう。どちらがおすぐれになっていらっしやるか私たちにはきめられせんわね」

こんなことを言う。中の君が、

「二人で向かい合っていらっしやるのを見た時、宮はうるおいのない醜^{わる}いお顔のようにお見えになった。別々に見れば優劣はない

方がたのように見えるのだけれど、美しい人というものは一方の美をそこねるものだから困るのね」

と言うと、人々は笑って、

「けれど宮様だけはおそこなわれにならないでしょう。どんな方だつて宮様にお勝ちになる美貌びようを持つておいでになるはずはございませんもの」

などと言うころ、客は今下車するのであるらしく、前駆の人払いの声がやかましく立てられていたが、急には薫かおるの姿がここへ現われては来なかった。

待ち遠しく人々が思うところに縁側を歩んで来た大将は、派手はでな

美貌というのではなしに、艶えんで上品な美しさを持っていて、だれもその人に羞恥しゅうちを覚えさせられぬ者はなく、知らず知らず額髪ふくさいも直されるのであった。貴人らしく、この上なく典雅な風采が薫かほには備わっていた。御所から退出した帰り途みちらしい。前駆の者がひしめいている気配けはいがここにも聞こえる。

「昨晚中宮がお悪いということを知りまして、御所へまいってみますと、宮様がたはどなたも侍しておられないので、お気の毒に存じ上げてこちらの宮様の代わりに今まで御所にいたのです。今朝けさも宮様のおいでになるのがお早くなかったのです、これはあなたの罪でしようと私は解釈していたのですよ」

と大将は言った。

「ほんとうに深いお思いやりをなさいますこと」

夫人はこう答えただけである。宮が御所にとどまっておいでになるのを見てこの人はまた中の君と話したくなって来たものらしい。

いつものようになつかしい調子で薫は話し続けていたが、ともすればただ昔ばかりが忘れなくて、現在の生活に興味の持たれぬことを混ぜて中の君へ訴えようとするのであった。この人の言っているように長い時間を隔ててなお恋の続いているわけはない、これは熱愛するようにその昔に言い始めたことであつたか

ら、忘れていぬふうを装うのではないかと女王にょおうは疑ってもみたが、人の心は外見にもよく現われてくるものであるから、しばらく見ているうちに、この人の故人への思慕の情が岩木でない人にはよくわかるのであった。この人を思う心も縷々るると言われるのに中の君は困っていて、恋の心をやめさせる禊みそぎをさせたい気にもなったが、人型ひとがたの話をしだして、

「このごろはあの人、そつとこの家うちに來ています」

とほのめかすと、男もそれをただごととして聞かれなかった。牽引力けんいんりよくのそこにもあるのを覚えたが、にわかになれなかった。にわかになれなかった。

「でもその御本尊が私の願望を皆受け入れてくださるのであれば尊敬されますがね。いつも悩まされてばかりいるようでは、信仰も続きませんよ」

「まあ、あなたの信仰ってそれくらいなのですね」

ほのかに中の君の笑うのも薫には美しく聞かれた。

「では完全に私の希望をお伝えください。御自身の一時のがれの口実だと伺っていると、あとに何も残らなかった昔のことが思い出されて恐ろしくなります」

こう言ってまた薫は涙ぐんだ。

見し人のかたしろならば身に添へて恋しき瀬々のなでものに
せん

これを例の冗談じょうだんにして言い紛らわしてしまった。

「みそぎ河瀬がは々にいださんなでものを身に添ふかげとたれか頼
まん

『ひくてあまたに』（大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へど
えこそ頼まざりけれ）とか申すようなことで、出過ぎたことです

が私は心配されます」

「『つひによるせ』（大ぬさと名にこそ立てれ流れてもつひの寄る瀬はありけるものを）はどこであると思っていることはあなたにだけはおわかりになるはずですし、その話のほうのははかない水の泡と争って流れる撫物なでものでしかないのですから、あなたのお言葉のようにたいした効果を私にもたらしてくれもしないでしょう。私はどうすれば空虚になった心が満たされるのでしょうか」

こんなことを言いながら薫が長く帰って行こうとしないのもうるさくて、中の君は、

「ちよつと泊りがけでまいつている客も怪しく思わないかと遠慮がされますから、今夜だけは早くお帰りくださいまし」

と言い、上手じょうずに帰りを促した。

「ではお客様に、それは私の長い間の願いだったことを言つてくだすつて、にわかな思いつきの浅薄な志だと取られないようにしていただければ、私も自信がついて接近して行けるでしょう。恋愛の経験の少ない私には、女性の好意を求めに行くようなことなどは今さら恥ずかしくてできなくなっています」

薫はこう頼んで歸つて行つた。姫君の母は薫をりっぱだと思ひ、理想的な貴人であると心でほめて、乳母めのとが左近少将への復讐ふくしゅう

として思いつき、たびたび勧めたのを、あるまじいことだと退けていたが、あの風采ふうさいの大將であれば、たまさかな通い方をされても忍ぶことができよう、自分の娘は平凡人の妻とさせるにはあまりに惜しい美が備わっているのに、東国の野蛮な人たちばかりを見て来た目では、あの少將をすら優美な姿と見て婿にも擬してみたと、くちおしいまでも破れた以前の姫君の婚約者のことをこの女は思うようになった。

よりかかっていた柱にも敷き物にも残った薫のにおいのかんばしさを口にしては誇張したわざとらしいことにさえなるであろうと思われた。おりおり見る人さえもそのたびごとにほめざるを得

ない薫であつたのである。

「お経をたくさん読んだ人に、その報いの現われてくることの書いてある中に、芳香を身体からだに持つということを経最高のものに仏様が書いておありになるのも道理だと思われすね。薬王品やくおうぼんなどに特にそれが書いてありますね。牛頭ごず梅檀せんたんの香とかこわいような名だけれど、私たちは大將様にお近づきできることで仏様のお言葉に嘘うそのないことをわからせていただきました。御幼少の時から仏勤めをよくあそびしたからよ」

「でもこの世だけの信仰の結果とは思われませぬね。どんな前生を持っていらつしやつたのか、それが知りたくなりますわ」

などとも言つて口々にほめるのを、常陸夫人は知らず知らず微笑して聞いていた。中の君はそつと薫に託された話をした。

「一度お思いになつたことは執拗しつようなほどにもお忘れにならない、まれな頼もしい性質でね。それは今はまあ御新婚された時などで、めんどろが多い気もあなたはするでしょうけれど、あなたが尼にさせようかなどとも思つておいでになるのなら、その気で試みてごらんになつたらどう」

「つらい思いも味わわせず、人に輕蔑けいべつもさせたく思いません心から、鶏とりの声も聞こえませぬような僧房住まいをおさせする氣になつていたのですが、大将さんをはじめてお見上げして、ああし

た方にはたとえ下仕えしもにでも御奉公できますことは生きがいがあることと思われましてございます。年のいった者でもそう思うのですから、まして若い人はあの方に好感を持つことだろうと思われそうですもの、相手がごりっぱであればあるだけ卑下がされまして、物思いの種を心に蒔まかせることになりはしないでしょうかと苦勞に考えられます。身分の高低にかかわらず、女というものはねたましがらせられることで、この世のため、未来の世のために罪ばかりを作ることになるものだと思いますと、それがかわいそうでございます。しかし何も皆あなたの思召おぼしめし次第でございます。どんなにでもお定めきになって、お世話をくださいますせ」

と常陸夫人の言うのを聞いていて、中の君は重い責任を負わされた気がして、

「今までの親切な心を知っているだけで将来のことは私に保証ができないのだから、そう言われるとどうしてよいかわからない」

と歎息をしたままでその話はしなくなった。

夜が明けると車などを持って来て、常陸守の帰りを促す腹だたしげな、威嚇^{いかく}的な言葉を使いが伝えたため、

「もったいないことですが、万事あなた様をお頼みに思わせていただきまして、あの方をお手もとへ置いてまいります。『いかならん巖^{いはほ}の中に住まばかは』（世のうきことの聞こえこざらん）と

ばかり苦しんでおります間だけを隠してあげてくださいませ。哀れな人と御覧くださいまして、教えられておりませんことをお教えくださいませ」

などと、昔の中将の君は夫人に泣きながら頼んでおいて帰って行こうとした。姫君は母に別れていたこともない習慣から心細く思うのであったが、はなやかな貴族の家庭にしばらくでも混じって行けるようになったことはさすがにうれしかった。

常陸夫人の車の引き出されるころは少し明るくなっていたが、ちようどこの時に宮は御所からお帰りになった。若君に心がお惹ひかれになるために御微行の体で車なども例のようではなく簡単なの

に召しておいでになったのと行き合つて、常陸家の車は立ちどまり、宮のお車は廊に寄せられてお下りおになるのであつた。だれの車だろう、まだ暗いのに急いで出て行くではないかと宮は目をおとめになった。こんなふうにして人目を忍んで通う男は歸つて行くものであると、御自身の経験から悪い疑いもお抱きになった。

「常陸様がお歸りになるのでございます」

と、出る車に従つた者は言つた。

「りっぱなさまだね」

と若い前駆の笑い合っているのを聞いて、常陸の妻は、こんなにまで懸隔のある身分であつたかと悲しんだ。ただ姫君のために

自分も人並みな尊敬の払われる身分がほしいと思った。まして姫君自身をわが階級に置くことは惜しい悲しいことであるといよいよこの人は考えるようになった。

宮は夫人の居間へおはいりになって、

「常陸さんという人があなたの所へ通っているのではないか、艶えんな夜明けに急いで出て行った車付きの者が、なんだかわざとらしいこしらえ物のようだった」

まだ疑いながらお言いになるのであった。人間きの恥ずかしい困ったことをお言いになると思い、

「大輔たゆうなどの若いころの朋輩ほうばいは何のはなやかな恰好かっこうもしていませ

んのに、仔細しさいのありそうにおっしやいますのね。人がどんなに悪く解釈するかもしれないようなことにわざとしてお話しなさいます。『なき名は立てで』（ただに忘れね）」

と言つて、顔をそむける夫人は可憐かれんで美しかった。そのまま寢室に宮は朝おそくまで寢やすんでおいでになったが、伺候者が多数に集まつて来たために、正殿のほうへお行きになった。

中宮ちゆうぐうの御病気はたいしたものでなくすぐ快くおなりになったことになれも安心して、まいていた左大臣家の子息たちなどもごいっしょに碁を打ち韻塞いんふたぎなどしてこの日を暮した。

夕方に宮が西の対へおいでになった時に、夫人は髪を洗つてい

た。女房たちも部屋^{へや}へそれぞれはいつて休息などをしていて、夫人の居間にはだれというほどの者もいなかった。小さい童女を使いにして、

「おりの悪い髪洗いではありませんか。一人ぼっちで退屈をしていなければならぬ」

と宮は言っておやりになった。

「ほんとうに、いつもはお留守の時に済ませるのに、せんだつてうちはおつくうがりになってあそばさなかったし、今日が過ぎれば今月に吉日はないし、九、十月はいけないことになるし
と思つて、おさせしたのですがね」

と大輔は氣の毒がり、若君も寝ていたのでお寂しかろうと思
い、女房のだれかれをお居間へやった。

宮はそちらこちらと縁側を歩いておいでになったが、西のほう
に見馴なれぬ童女が出ていたのにお目がとまり、新しい女房が来て
いるのであろうかとお思ひになつて、その座敷を隣室からおの
ぞきになった。間の襖あい子の細めにあいた所から御覧になると、襖
子の向こうから一尺ほど離れた所に屏風びょうぶが立ててあつた。その間
の御簾みすに添えて几帳が置かれてある。几帳の垂たれ帛ぎぬが一枚上へ掲
げられてあつて、紫苑色しおんのはなやかな上に淡黄うすきの厚織物らしいの
の重なつた袖口そでぐちがそこから見えた。屏風の端が一つたたまれて

あつたために、心にもなくそれらを見られているらしい。相当に
よい家から出た新しい女房なのであろうと宮は思召して、立って
おいでになった室^{へや}から、女のいる室へ続いた庇^{ひさし}の間の襖^{あい}子をそつ
と押しあけて、静かにはいつておいでになったのをだれも気がつ
かずにいた。

向こう側の北の中庭の植え込みの花がいろいろに咲き乱れた、
小流れのそばの岩のあたりの美しいのを姫君は横になってながめ
ていたのである。初めから少しあいていた襖子をさらに広くあけ
て屏風の横から中をおのぞきになったが、宮がおいでになろうな
どとは思ひも寄らぬことであつたから、いつも中の君のほうから

通つて来る女房が来たのであらうと思ひ、起き上がったのは、宮のお目に非常に美しくうつつて見える人であつた。例の多情なお心から、この機会をはずすまいとあそばすように、衣服の裾すそを片手でお抑おさえになり、片手で今はいつておいでになつた襖子を締め切り、屏風の後ろへおすわりになつた。

怪しく思つて扇を顔にかざしながら見返つた姫君はきれいであつた。扇をそのままにさせて手をお捉とらえになり、

「あなたはだれ。名が聞きたい」

とお言ひになるのを聞いて、姫君は恐ろしくなつた。ただ戯れ事の相手として御自身は顔を外のほうへお向けになり、だれと知

れないように宮はしておいでになるので、近ごろ時々話に聞いた大将なのかもしれぬ、においの高いのもそれらしいと考えられることによって、姫君ははずかしくてならなかった。乳母は何か人が来ているようなのがいぶかしいと思い、向こう側の屏風を押しあけてこの室へはいつて来た。

「まあどういたしたことでございましょう。けしからぬことをあそばします」

と責めるのであったが、女房級の者に主君が戯れているのにとがめ立てさるべきことでもないと言はしておいでになるのであった。はじめて御覧になった人なのであるが、女相手にお話をあそ

ばすことの上手じょうずな宮は、いろいろと姫君へお言いかけになつて、日は暮れてしまつたが、

「だれだと言つてくれない間はあちらへ行かない」

と仰せになり、なれなれしくそばへ寄つて横におなりになつた。宮様であつたと氣のついた乳母は、途方にくれてぼんやりとしていた。

「お明りは燈籠とうろうにしてください。今すぐ奥様がお居間へおいでになります」

とあちらで女房の言う声がした。そして居間の前以外の格子はばたばたと下ろおされていた。この室は別にして平生使用されてい

ない所であつたから、高い棚厨子たなずし一具が置かれ、袋に入れた屏風なども所々に寄せ掛けてあつて、やり放しな座敷と見えた。こうした客が来ているために居間のほうからは通路に一間だけ襖子があけられてあるのである。そこから女房の右近という大輔たゆうの娘が来て、一室一室格子を下ろしながらこちらへ近づいて来る。

「まあ暗い、まだお灯あかりも差し上げなかったのでございますね。まだお暑苦しいのに早くお格子を下ろしてしまつて暗闇くらやみに迷うではありませんませんかね」

こう言つてまた下ろした格子を上げている音を、宮は困つたように聞いておいでになった。乳母もまたその人への体裁の悪さを

思っていたが、上手に取り繕うこともできず、しかも気がさ者の、そして無智むちな女であつたから、

「ちよつと申し上げます。ここに奇怪なことをなさる方がございますの、困つてしまひまして、私はここから動けないのでございますよ」

と声をかけた。何事であらうと思つて、暗い室へ手探りではいと、桂姿うちぎすがたの男がよい香をたてて姫君の横で寝ていた。右近はすぐに例のお癖を宮がお出しになつたのであらうとさとした。姫君が意志でもなく男の力におさえられておいでになるのであるうと想像されるために、

「ほんとうに、これは見苦しいことでございます。右近などは御忠告の申し上げようもございませんから、すぐあちらへまいりまして奥様にそつとお話をいたしましょう」

と言って、立つて行くのを姫君も乳母もつらく思ったが、宮は平然としておいでになって、驚くべく艶美な人である、いったい誰なのであろうか、右近の言葉づかいによっても普通の女房ではなさそうであると、心得がたくお思いになって、何ものであるかを名のろうとしない人を恨めしがっているろと言っておいでになった。うとましいというふうも見せないのであるが、非常に困っていて死ぬほどにも思っている様子が哀れで、情味をこめた

言葉で慰めておいでになった。

右近は北の座敷の始末を夫人に告げ、

「お気の毒でございます。どんなに苦しく思っ
ていらっしやるで
しょう」

と言うと、

「いつものいやな一面を出してお見せになるのだね。あの人のお
母さんも軽佻けいちやうなことをなさる方だと思ふようになるだろうね。安
心していらっしやいと何度も私は言っ
ておいたのに」

こう中の君は言つて、姫君を憐あわれむのであつたが、どう言つて
制しにやっ
ていいかわからず、女房たちも少し若くて美しい者は

皆情人にしておしまいになるような悪癖がおりになる方なのに、またどうしてあの人のいることが宮に知られることになったのであろうと、あさましさにそれきりものも言われない。

「今日は高官の方がたくさん伺候なすった日で、こんな時にはお遊びに時間をお忘れになって、こちらへおいでになるのがお遅くおそなるのですものね、いつも皆奥様なども寝やすんでおしまいになっていきますわね。それにしてもどうすればいいことでしょう。あの乳ばあ母やが気のききませんことね。私はじっとおそばに見ていて、宮様をお引っ張りして来たいようにも思いましたよ」

などと右近が少将という女房といっしょに姫君へ同情をしてい

る時、御所から人が来て、中宮が今日の夕方からお胸を苦しがつておいであそばしたのが、ただ今急に御容体が重くなつた御様子であると、宮へお取り次ぎを頼んだ。

「あやにくな時の御病氣ですこと、お気の毒でも申し上げてきましよう」

と立って行く右近に、少将は、

「もうだめなことを、憎まれ者になつて宮様をお威おどしするのはおよしなさい」

と言つた。

「まだそんなことはありませんよ」

このささやき合いを夫人は聞いていて、なんたるお悪癖であるう、少し賢い人は自分をまであさましく思ってしまうであろうと歎息をしていた。

右近は西北の座敷へ行き、使いの言葉以上に誇張して中宮の御病気をあわただしげに宮へ申し上げたが、動じない御様子で宮はお言いになった。

「だれが来たのか、例のとおりにたいそうに言っておどすのだね」

「中宮のお侍の平たいらの重常しげつねと名のりましてございます」

右近はこう申した。別れて行くことを非常に残念に思召され

て、宮は人がどう思ってもいいという気になっておいでになるのであるが、右近が出て行って、西の庭先へお使いを呼び、詳しく聞こうとした時に、最初に取り次いだ人もそこへ来て言葉を助けた。

「中務^{なかつかさ}の宮もおいでになりました。中宮大夫もただ今まいられます。お車の引き出されます所を見てまいりました」

そうしたように発作的にお悪くおなりになることがおりおりあるものであるから、嘘^{うそ}ではないらしいと思召すようになった宮は、夫人の手前もきまり悪くおなりになり、女へまたの機会を待つことをこまごまとお言い残しになってお立ち去りになった。

姫君は恐ろしい夢のさめたような気になり、汗びったりになっていた。乳母は横へ来て扇であおいだりしながら、

「こういう御殿というものは人がざわざわとしていまして、少しも気が許せません。宮様が一度お近づきになった以上、ここにおいでになってよいことはございませんよ。まあ恐ろしい。どんな貴婦人からでも嫉妬しつとをお受けになることはたまらないことですよ。全然別な方にお愛されになるとも、またあとで悪くなりまして、それもそれは運命としてお従いにならなければなりません。宮様のお相手におなりになっては世間体も悪いことになろうと思ひまして、私はまるで蝦蟇がまの相になってじっとおにらみしていますと、

気味の悪い卑しい女めと思召して手をひどくおつねりになりましたのは匹夫の恋のようで滑稽こっけいに存じました。お家のほううちでは今日もひどい御夫婦喧嘩げんかをあそばしたそうですよ。ただ一人の娘のためには自分の子供たちを打ちやっておいて行った。大事な婿君のお来始めになったばかりによそへ行っているのは不都合ふごうだなどと、乱暴なほどに守はお言いになりましたそうで、下の侍しもでさえ奥様をお気の毒だと言っていました。こうしたいろいろなことの起くるのも皆あの少将さんのせいですよ。利己的な結婚沙汰ざたさえなければ、おりおり不愉快なことはありませんでもまずまず平和なうちに今までどおりあなた様もおいでになれたのですかね」

歎息をしながら乳母はこう言うのであった。

姫君の身にとっては家のことなどは考える余裕もない。ただちん闖にゆうしゃ入者が来て、経験したこともない恥ずかしい思いを味わわされたについても、中の君はどう思うことであろうと、せつなく苦しくて、うつ伏しになって泣いていた。見ている乳母は途方に暮れて、

「そんなにお悲しがりになることはございませんよ。お母様のない人こそみじめで悲しいものなのですよ。ほかから見れば父親のままははない人は哀れなものに思われますが、性質の悪いままはは継母に憎まれているよりはずっとあなたなどはお楽なのですよ。どうにかよろし

いように私が計らいますからね、そんなに気をめいらせないでおいでなさいませ。どんな時にも初瀬はせの観音がついてあなたを守つておいでになりますからね、観音様はあなたをお憐あわれみになりますよ。お参りつけあそばさない方を、何度も続けてあの山へおつれ申しましたのも、あなたを軽蔑けいべつする人たちに、あんな幸運に恵まれたかと驚かす日に逢あいたいと念じているからでしたよ。あなたは人笑われなふうでお終わりになる方なものですか」

と言ひ、樂觀させようと努めた。

宮はすぐお出かけになるのであつた。そのほうが御所へ近いからであるのか西門のほうを通つてお行きになるので、ものをお言

いになるお声が姫君の所へ聞こえてきた。上品な美しいお声で、恋愛の扱われた故い詩を口ずさんで通ってお行きになることで、煩わしい気持ちを姫君は覚えていた。お替え馬なども引き出して、お付きして宿直を申し上げる人十数人ばかりを率いておいでになった。

中の君は姫君がどんなに迷惑を覚えていることであろうとかわいそうで、知らず顔に、

「中宮様の御病気のお知らせがあつて、宮様は御所へお上がりになりましたから、今夜はお帰りが無いと思います。髪を洗ったせいで、気分がよくなってじっとしていますが、こちらへおい

でなさい。退屈でもあるでしょう」

と言わせてやった。

「ただ今は身体が少し苦しくなっておりますから、癒りましてから」

姫君からは乳母を使いにしてこう返事をして来た。どんな病気かとまた中の君が問いにやると、

「何ということはないのですが、ただ苦しいのでございます」

とあちらでは言った。少将と右近とは目くばせをして、夫人は片腹痛く思うであろうと言っているのは姫君のために気の毒なことである。

夫人は心で残念なことになった、薫^{かおる}が相当熱心になつて望んでいた妹であつたのに、そんな過失をしたことが知れるようになれば軽蔑^{けいべつ}するであらう、宮という放縦なことを常としていられる方は、ないことにも疑念を持ちうるさくお責めにもなるが、また少々の悪いことがあつてもぜひもないようにおあきらめになりそうであるが、あの人はそうでなく、何とも言わないままに情けないことにするであらうのを思うと、妹はどんなに気恥ずかしいことかしれぬ、運命は思いがけぬ憂苦を妹に加えることになった、長い間見ず知らずだった人なのであるが、逢^あつて見れば性質も容^{よう}貌^{ぼう}もよく、愛せずにはいられなくなった妹であつたのに、こんな

ことが起こってくるとはなんたることであろう、人生とは複雑に
むずかしいものである、自分は今の身の上に満足しているもので
はないが、妹のような辱^{はずか}しめもあるいは受けそうであつた境遇に
いたにもかかわらず、そうはならず正しく人の妻になりえた点
だけは幸福と言わねばなるまい、もう自分は薫が恋をさえ忘れて
くれて、以前の友情でつきあつて行けることになれば、何も深く
憂えずに暮らす女になろうと思つた。多い髪であるから、急には
かわかきれずにすわっていねばならぬのが苦しかった。白い服
を一重だけ着ている中の君は繊細^{きやしや}で美しい。

姫君はほんとうに身体が苦しくなつていたのであるが、乳母

は、

「そんなふうにしておいでになつては、痛くない腹をさぐられま
す。何か事のあつたように女王様にょおうは思いになつていらつしやる
かもしれませんから、ただおおようなふうにしてあちらへいらつ
しやいませ。右近さんなどには事実を初めからお話しいたします
よ」

と言ひ、しいて促し立てておき、夫人の居室いの襖子まの前へまで
行き、

「右近さんにちよつとお話しいたしたいことが」
と言つた。出て来たその人に、

「御冗談じょうだんをなさいました方様のために、お姫様は驚いて気もお失いになるばかりなのですよ。ほんとうのひどい目にでもおあいになった人のように苦しいふうをお見せになるのでお気の毒でなりません。奥様から慰めてあげていただきたいと私はお願いに出たのでございます。過失もなさいませんでしたのに、恥ずかしくてならぬように思召すのもお道理でございますよ。異性のことがよくわかっておいでになる方であれば、これは何でもないこととおわかりになるのでしょうか、そうでないところに純粹なところも持っていらっしゃるのだと拝見しています」

と言っておき、姫君を引き起こして夫人の所へ伴って行くので

あつた。人のするままに任せて、他人がどんな想像をしているだろうと思うことに羞恥しゅうちは覚えるのであるが、柔らかなおおう過ぎたほどの性質の人であつたから、乳母に押し出されて夫人の居間の中へはいった。額髪などの汗と涙でひどく濡ぬれたのを隠したく思い、灯あかりのほうから顔をそむけた姫君は、夫人をこれ以上の美人はないと常にながめている女房たちが見て、劣つたふうもなく、貴女きじよらしく美しい、宮がこの方をお愛しになるようになったら気まずいことを見ることになるう、これほどの人でなくても、新しい人をお喜びになる宮の御性質であるからと、夫人に侍していた二人ほどの女房は、姫君の隠しきれない顔を見て思ってい

た。中の君はなつかしいふうで話していて、

「あなたの家と違った所だところを思わないでいらっしやいよ。

お姉様がお亡^{かく}れになってから、私は姉様のことばかりが思われ
て、忘れることなどは少しもできなくてね、自分の運命ほど悲し
いものはないと思つて暮らしていたのですがね、あなたという姉
様によく似た人を見ることができるようになって、ずいぶん慰め
られてますよ。私にはほかにあなたのような妹はないのですか
ら、お父様の御愛情を私から受け取る気になってくださったらう
れしいだろうと思います」

などとも夫人は語るのであつたが、宮から愛のささやきをお受

けした心のひけ目がある上に、よい環境に置かれていなかった人は、姉君に応じて何もものが言えないというふうがあつて、

「長い間とうていおそばなどへまいれるものでないと思つていましたのに、こんなに御親切にいろいろとしていただけののですもの、どんなことも皆慰められる気がいたします」

とだけ、少女らしい声おとめで言つた。夫人が絵などを出させて、右

近に言葉書きを読ませ、いっしよに見ようとすると、姫君は前へ出て、恥じてばかりもいず熱心に見いだした灯影ひかげの顔には何の欠点もなく、どこも皆美しくきれいであつた。清い額つきがにおうように思われて、おおような貴女きじよらしさには総角あげまきの姫君がただ思

い出されるばかりであつたから、夫人は絵のほうはあまり目にとめず、身にしむ顔をした人である、どうしてこうまで似ているのであるう、大姫君は宮に、自分は母君に似ていると古くからいる女房たちは言っていたようである、よく似た顔というものは人が想像もできぬほど似ているものであると、故人に思い比べられて夫人は姫君を涙ぐんでながめていた。故人は限りもなく上品で気^{けだ}高くありながら柔らかな趣を持ち、なよなよとしすぎるほどの姿であつた。この人はまだ身のこなしなどに洗練の足らぬところがあり、また遠慮をすぎるせいか美しい趣は劣って見える、重々しいところを加えさせるようにすれば大将の妻の一人になつても不

似合いには見えまいなどと、姉心になって気もつかっている中の君であつた。話し合つて夜明け近くまでなつてから寝やすんだのであるが、夫人はそばへ寝させて、父宮についてお亡かくれになるまでの御様子などを、ことごとくではないが話して聞かせた。聞けば聞くほど恋しく、ついにお逢いすることがなく終わったことをくやしく悲しく姫君は思った。

昨夜のできごとを知っている女房たちは、

「実際はどんなことだったのでしよう、おかわいらしいお顔をしていらっしゃるあの方を、奥様はあんなに大事にしておいでになつても、もう泥土でいどに落ちた花ではありませんか、気の毒な」

と一人が言うのを、右近は、

「そこまでは進まなかったのでしょうか。あの乳母ばあやが私をつかまえて、放すものかというようにもしてこぼしていた話にも、そこまでも行った御冗談じょうだんだったとは言ってますでしたよ。宮様も近づきながら恋を成り立たせえなかったような意味の詩を口ずさんでおいでになりましたもの。けれどもそれはわざとそうお見せになろうとするためか私は知りませんよ」

やや釈明的にも言い、二人は姫君に同情した。

乳母めのとは車の拝借を申し出て常陸ひたち様の所へ帰って行った。常陸夫人に昨夜のことを報告するとはっと驚いたふうが見えた。女房た

ちもけしからぬことだと言いもし、思いもするであろう、夫人はまたどんなふうと思うことか、嫉妬しつとの憎しみというものは貴婦人も何もいっしよなのであるからと、自身の性情から一大事のように思い、じつとはしておられず、その夕方に二条の院へまいった。宮のおいでにならぬ時であつたから常陸の妻は気安く思い、「まだ幼稚なところの改まりません方をおそばへ置いてまいりましたものですから、あなた様にお任せして安心はさせていただいていながら、気がかりでならぬような思いもいたされまして、いっこう落ち着いてもいられないふうでいますものですから、下品な人たちに腹をたてられたり、怨うらまれたりもいたしましてござ

います」

と昔の中将の君は言いだした。

「そんなにあなたが言うほど幼稚な人でもないのに、気がかりでならぬように言って興奮しておいでになるから、私はおこられるのではないかと心配ですよ」

と笑った夫人の眼つきの気品の高さにも常陸の妻は心の鬼から親子を恥知らずのように見られている気がした。胸の中ではどんなに口惜しがっておいでになるかもしれぬと思うと、あの問題には触れていくことができないのであった。

「こうしておそばへ置いていただきますことは、長い間の念願の

かないました気が私もしまして、世間の人に聞かれましても、あの人の名誉になることと存じますが、しかし考えますれば、あまりにも無遠慮なことでございます。尼にして深い山へ入れてしまいましたほうが賢明ないたし方だったのでしようが」

と言って泣くのも中の君にはかわいそうで、

「ここにお置きになって、何もあなたが気がかりに思う必要はないのですよ。十分のことはできなくても、私が愛していないのなら不安は不安でしょうが、そうではありませんよ。悪い癖をお出しになる方が時々ここへはおいでのになるけれど、女房たちだって皆知っていて警戒をしますから、あの人の迷惑になるようにはし

ないだろうと思いますけれど、あなたはどんな想像をしておいでのなるの」

こう言っていた。

「あなた様の御愛情を疑うということは決してございません。昔の宮様があの方を子にしてくださいませんでしたことも、あなたへお恨みする筋はないのでございます。それは別にいたしまして、あなた様と私とは血縁があるのでございますから、それだけでおすがりもいたすのでございます」

などと真心を見せて言ったあとで、

「明日と明後日あすあさってがあの方のために大事な謹慎日なのでございます

が、こういたしましたお出入りの人の多い所でない場所です。その間を過ごさせまして、またおつれいたしましょう」

と常陸夫人は言い、姫君をつれて行こうとするのであった。中の君はこれを本意ほんいないことに思ったが、とめることはできなかつた。あのできごとに心の乱れている女であつたから、あまり長く話もせず去つた。

姫君のための何かの場合に使おうと思い、この人は家をかねて一つ用意させてあつた。三条辺でしゃれた作りの家なのであるが、まだまったくはでき上がっていず、行き渡つた装飾がされてゐるでもなかつた。

「あなた一人で苦勞が尽きない。薄命な自分などは、明日というようなものを頼みにせず早く死んでおればよかったのですよ。自分だけは生まれた家にもふさわしくない地方官の家の中にはいつて、一生をしんぼうもしよう、ただあなたをそうした人と同じように扱わせることが忍ばれないことに思われましてね、お姉様をおたよらせしてやったのですが、醜いことがそこで起こればいっそう世間体の恥ずかしいことになります。いやなことですよ。不都合な家でもこの家に隠れていらっしやい。だれにも知れないようにしてね、私はどんなにでもしてあなたのためによくしてあげますから」

こう言い置いて常陸の妻は娘のところから帰ろうとした。姫君は泣いて、生きているだけでさえ人迷惑な自分らしいと気をめいらせているのがかわいそうに見えた。親の心にはまして不憫で、もったいないほど美しいこの人を、その価値にふさわしい結婚がさせたいと思う心から、二条の院のできごとのようなことが噂になり、その名の傷つけられるのを残念がっているのであった。聡明な点もある女ながらすぐ腹をたてるわがままなところも持つ女なのである。守の本宅のほうにも隠して住ませておくことはできただけであるが、そうしたみじめな起居はさせたくないとして別居をさせ始めたのであって、生まれてからずっといっしょにばか

りいた母と子であるため、双方で心細く思い、悲しがつているのである。

「ここはまだよくでき上がっていないで、危険でもある家ですからね、よく気をおつけなさい。宿直とのいをする侍のことなども私はよく命じておきましたけれど、まったく安心はできない。でも家のほうで腹をたてたり、恨んだりする人がありますから帰りますよ」

泣く泣く母は帰って行った。

婿の少将の歓待を最も大事なことでしている守かみは、妻がいつしよに家にいてしないのを怒おこるのである。夫人は不愉快で、この

少将のために姫君の身に災難も降りかかることになったと、だれよりも愛する子のことであつたから、反感ばかりがその男に持たれて、氣を入れた世話などはできなかつた。二条の院の宮の御前でみすばらしく見た時から軽蔑する氣になつた夫人であつたから、姫君の婿として大事に扱つてみたいなどと好意を持ったことは忘れていた。家ではどんなふうに見えるであろう、まだ自家の中で打ち解けた姿をしているところを自分は見なかつたと思い、少将がくつろいでいる昼ごろに今では守の愛嬢の居室に使われてゐる西座敷へ来て夫人は物蔭からのぞいた。柔らかい白綾の服の上に、薄紫の打ち目のきれいにできた上着などを重ねて、縁側に

近い所へ、庭の植え込みを見るために出てすわっている姿は、決して醜い男だとは見えない。娘は未完成に見える若さで、無邪気に身を横たえていた。母の目には兵部卿ひょうぶきやうの宮が夫人と並んでおいでになった時の華麗さが浮かんできて、どちらもつまらぬ夫婦であるともた思った。そばにいる女房じやうだんらに冗談じやうだんを言っている余裕のある様子などをながめていると、この間のように美しい気けもない男とは見えないため、二条の院でのぞいた時の他たの少将であつたかと思う時も時、

「兵部卿の宮のお邸やしきの萩はぎはきれいなものだよ。どうしてあんな種があつたのだろう。同じ花でも枝ぶりがなんというよさだつたら

う。この間伺った時にはもうすぐお出かけになる時だったから折っていただいて来ることができなかったよ。その時『うつろはんことだに惜しき秋萩に』というのをお歌いになった宮様を若い人たちに見せたかったよ」

と言うではないか。そして少将は自身でも歌を作っていた。あの利己心をなまなましく見せた時のことを思うと人とも見なされない男で、はなはだしく幻滅を感じさせた男に、ろくな歌はできるはずもないと母はつぶやかれたのであるが、そうまでも軽蔑してしまうことのできぬふうはさすがにしているため、どう答えるかためそうと思い、

しめゆひし小萩が上もまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ

と取り次がせてやると、少将は姑しゅうとめを気の毒に思つて、

「宮城野みやぎのの小萩がもとと知らませばつゆも心を分かずぞあらまし

そのうち自身でこの申しわけをさせていただきましょう」
と返事を伝えさせた。八の宮のことを聞いて知ったらしいと思
うと、いっそうその娘が大事に思われ、どうして他の子などと

いっしょに扱われようと考えられる母であつた。理由もなくこの時に薫かおるの面影が目に見えてきて、心の惹ひかれる思いがした。同じように美貌びぼうでおありになるとは宮を思つたが、こうした憧憬どうけいを持つて思うことはできない。娘を侮あなづつて無法に私室へ闖入ちんにゆうあそばされた方であると思うとくちおしいのである。大将は娘に興味を持つておいでになりながら直接に恋の手紙を送ろうともせず、表面はあくまで素知らぬ顔で通しているのも階級的な差別に因もとづくと思われるのはつらいがりっぱな態度であるなどと、母親は薫にばかり好感の持たれる自分を認め、若い姫君はまして二人の貴人を比較して見て大将に心の傾くことであらうと思われる。姫君の

婿にしようなどと少将のような無価値な男を思ったことが自分に
あつたのが恥ずかしいなどと母は姫君についての物思いばかりを
し続け、ああもして、こうもなつてとよいほうへと空想を進める
のであつたが、また反省してみて、自分の願いは実現が困難なこ
とである、あの高貴さと、あの風采ふうさいの備わつた大将は、もつと
もつと資格の完全な人を愛するはずである、顧みられる価値が姫
君にあるかどうかは疑わしい。世間を見ると、容貌と性情は尊卑
の階級によつて自然に備わるものらしい。自分の子供たちの中
に、だれ一人姫君に近い容貌ようぼうを持つ者がいないではないか、少将は
家ではすぐれた美男のように良人おとなどは見、自分ももとはそう

思っていたのが、兵部卿の宮とお見くらべした時に、つまらなさを知ったということからでも推理していくことができるのである。現代の帝王の御秘蔵の内親王を妻にしている人の、いま一人の妻に姫君を擬してみるのは恥ずかしいと、こんなことを考えていくと、しまいには頭も茫^{ぼう}としてくるのであった。

仮^ずり住居^{まい}にいる姫君は退屈していた。庭の草も目ざわりになるばかりできたないし、東国なまりの男たちばかりが出入りする人影であつたし、慰めになる花はなかつたし、落ち着かぬ所に晴れ晴れしからず暮らしている若い姫君の心には、宮の夫人が恋しく思われてならなかつた。闖^{ちん}入^{にゅう}しておいでになった宮の御様子もさ

すぐに思い出されて、内容はこまごまともわからなかったもの
身にしむお話しぶりです。いろいろと自分へお告げになったことが
あった、お帰りになったあとで周囲に残っていたかんばしいにお
いがまだ今も自分の身に残っている気がして、恐ろしい思いをし
たことさえ姫君は追想された。母のほうからはしみじみと情のこ
もった手紙が送って来られた。こんなにも愛してくれる母に心配
ばかりをかける自身の運命が悲しくて姫君は泣いてしまった。

馴^なれないあなたの日送りはどんなにつれづれかと思ひます。し
ばらくしんぼうをしていらつしやい。

とも書かれてあった、返事に、

退屈なことなどはなんでもありません。かえって今が気楽でよいという気がします。

ひたぶるに嬉し^{うれ}からまし世の中にあらぬ所と思はましかば

と姫君は書いた。この歌の幼稚な表現にも母の夫人はほろほろと泣いて、こんなに漂泊^{さすらいびと}人のようにさせておく親の無力さが悲しくなり、

うき世にはあらぬ所を求めても君が盛りを見るよしもがな

歌らしくもないこんな歌をよみ、親子はそうした贈答を心の慰めにした。

例年のように秋のふけて行くころになれば、寝ざめ寝ざめに故人のことばかりの思われて悲しい薫は、御堂みどうの竣成したしらせがあつたのを機に宇治の山荘へ行つた。かなり久しく出て来なかつたのであつたから、山の紅葉もみじも珍しい気がしてながめられた。毀こぼつたあとへ新たにできた寢殿は晴れ晴れしいものになっているのであつた。簡素に僧のように八の宮の暮らしておいでになった昔を思うと、その方の恋しく思われる薫は、改築したことさえ後悔される気になり、平生よりも愁うれわしいふうであたりをながめて

いた。当時の山莊の半分は寺に似た気分が出ていたが、半分は繊細に優しく女王^{にょおう}たちの住居^{すまい}らしく設備^{しつら}われてあったのを、網代屏風^{うづらふぶ}というような荒々しい装飾品は皆薫の計らいで御堂の坊のほうへ運ばせてしまい、そして風雅な山莊に適した道具類を別に造らせて、ことさら簡素に見せようともせず、きれいに上品な貴人の家らしく飾らせてあった。小流れのそばの岩に薫は腰を掛けていたが、その座は離れにくかった。

絶えはてぬ清水^{しみず}になどかなき人の面影をだにとどめざりけん

と歌い、涙をふきながら弁の尼の室のほうへ来た薫を、尼は悲しがつて見た。座敷の長押へ仮なように身体を置いて、御簾の端を引き上げながら薫は話した。弁の尼は几帳で姿を包んでいた。薫は話のついでに、

「あの話の人ね、せんだって二条の院に来ていられると聞いていましたかね、今さら愛を求めに歩く男のようなことは私にできなくて、そのままにしていますよ。やはりこの話はあなたから言うてくださるほうがいい」

人型の姫君のことを言いだした。

「この間あのお母様から手紙がまいりました。謹慎日の場所を搜

しあぐねて、あちらこちらとお変わらせしていますってね。そして現在もみじめな小家などにお置きしているのがおかawaiiそうなのですが、もう少し近い所ならお住ませするのにそちらは最も安心のできる所だと思いますが、荒い山路やまみちがあることを思うと躊躇ちゆうがされて実行ができませんと、こんなことを書いて来ておりました」

「私だけはだれも皆恐ろしがるその山道をいつまでも飽かずに出て来る人なのですね。どんな深い宿縁があつてのことかと思うのは身にしむことですよ」

例のように薫は涙ぐんでいた。

「ではその小さい簡単な家というのへ手紙をやってください。あなた自身で出かけてくれませんか」

と言う。

「あなた様の御用を勤めますことは喜んでいたしますが、京へ出ますことはいやでございましてね、二条の院へさえ私はまだ伺わないのでございます」

「いいではありませんか、いちいちあちらへ報告されるのであれば遠慮もいるでしょうが、愛宕山あたごにこもった上人しょうにんも利生方便りしょうほうべんのためには京へ出るではありませんか。仏へ立てた誓ちかいを破った人の願ねがいのかなうようにされることも大功徳くどくじゃありませんか」

「でも『人わたすことだになきを』（何をかもながらの橋と身のなりにけん）と申しますような老朽した尼が、ある事件に策動したという評判でも立ちましてはね」

と言い、弁が躊躇して行こうとしないのを、

「ちようどそんな仮住みをしているのは都合がよいというものですから、そうしてください」

例の薫のようでもなくしいて言い、

「明後日^{あさって}あたりに車をよこしましょう。そして仮住居の場所を車の者へ教えておいてください。私が訪ね^{たず}て行くことがあっても無法なことなどできるものではないから安心なさい」

と微笑しながら言うのを弁は聞いていて、迷惑なことが引き起こされるのではなからうかと思いつながらも、大將は浮薄な性質の人ではないのであるから、自分のためにも慎重に考えていてくれるに違いないという気になった。

「それでは承知いたしました。お邸やしきとは近いのでございますから、そちらへお手紙を持たせておつかわしくださいます。平生行きません所へそのお話を私が独断ひとりごめで来てするように思われますのも、今さら伊賀刀女いがとうめ（そのころ媒介をし歩いた種類の女）になりましたようできまりが悪うございます」

「手紙を書くことはなんでもありませんがね、人はいろいろな噂うわさ

をしたがるものですからね、右大將は常陸守ひたちのかみの娘に恋をしている
というようなことが言われそうで危険けんのんですよ。その常陸の旦那だんなは
荒武者なんだってね」

と薫が言ったので弁は笑ったが、心では姫君がかわいそうに思
われた。

暗くなりかかったので大將は帰って行くのであった。林の下草
の美しい花や、紅葉もみじを折らせた薫は夫人の宮にそれらをお見せし
た。りっぱな方なのであるが敬遠した形で、良人おととらしい親しみを
薫は持たないらしい。帝みかどからは普通の父親のように始終尼宮へお
手紙で頼んでおいでになるのもあって、薫は女二にょにの宮みやをたいせ

つな人にはしていた。宮中、院の御所へのお勤め以外にまた一つの役目がふえたように思われるのもこの人に苦しいことであつた。

薫は弁に約束した日の早朝に、親しい下級の侍に、人にまだ顔を知られていぬ牛付き男をつれさせて山莊へ迎えに出した。莊園のほうにいる男たちの中から田舎者らしく見えるのを選んでつけさせるように薫は命じてあつた。

ぜひ出てくるようにとの薫の手紙であつたから、弁の尼はこの役を勤めることが気恥ずかしく、気乗りもせず思いながら化粧をして車に乗った。野路山路の景色を見て、のみちやまみちの景色を見て、けしき薫が宇治へ来始めた

ころからのことばかりがいろいろと思われ、総角あげまきの姫君の死を悲しみ続けて目ざす家へ弁は着いた。簡単な住居すまいであつたから、氣樂に門の中へ車を入れ、自身の来たことについて来た侍に言わせると、姫君の初瀬詣はせもうでの時に供をした若い女房が出て来て、車から下おりるのを助けてくれた。

つまりぬ庭ばかりをながめて日を送っていた姫君は、話のできる人の来たのを喜んで居間へ通した。親であつた方に近く奉公した人と思うことで親しまれるのであるらしい。

「はじめてお目にかかりました時から、あなたに昔の姫君のお姿がそのまま残っていますことで、始終恋しくばかりお思いするの

でしたが、こんなにも世の中から離れてしまいました身の上では
兵部卿ひょうぶきやうの宮様のほうへも伺いにくくてまいれませんほどで、つい
お訪たずねもできないのでございました。それなのに、右大將が御自
分のためにぜひあなたへお話を申しに行けとやかましくおっしゃ
るものですから、思い立って出てまいりました」

と弁は言った。姫君も乳母めのともりっぱな風采ふうさいを知っていた大將で
あったから、まだあの話を忘れずに続けて申し込んでくれること
に喜びは覚えたのであるが、こんなに急に策を立てて接近しようと
薫がしていたことには気づかない。

夜の八時過ぎに宇治から用があつて人が来たと言って、ひそか

に門がたたかれた。弁は薰であろうと思つていたので、門をあけさせたから、車はずっと中へはいって来た。家の人は皆不思議に思つてみると、尼君に面会させてほしいと言い、宇治の莊園の預かりの人の名を告げさせると、尼君は妻戸の口へいざって出た。小雨が降つていて風は冷ややかに室の中へ吹き入るのといっしょにかんばしいかおりが通つてきたことによつて、来訪者の何者であるかに家の人は気づいた。だれもだれも心ときめきはされるのであるが、何の用意もない時であるのに、あわてて、どんな相談を客は尼としてあつたのであらうと言ひ合つた。

「静かな所で、今日までどんなに私が思い続けて来たかというこ

ともお聞かせしたいと思つて来ました」

と薫は姫君へ取り次がせた。どんな言葉で話に答えていけばよいかと心配そうにしている姫君を、困ったものであるというように見ていた乳母が、

「わざわざおいでになつた方を、庭にお立たせしたままでお帰しする法はございませんよ。本家の奥様へ、こうこうでございますとそつと申し上げてみましょう。近いのですから」

と言つた。

「そんなふうに騒ぐことではありませんよ。若い方どうしがお話をなさるだけのことで、そんなにものが進むことですか。怪しい

ほどにもおあせりにならない落ち着いた方ですもの、人の同意のないままで恋を成立させようとは決してなさいますまい」

こう言つてとめたのは弁の尼であつた。雨脚あめあしがややばげしくなり、空は暗くばかりなつていく。宿直とのいの侍が怪しい語音ごいんで家の外を見まわりに歩き、

「建物の東南のくずれている所があぶない、お客の車を中へ入れてしまうものなら入れさせて門をしめてしまつてくれ、こうした人の供の人間に油断ができないのだよ」

などと言ひ合っている声の聞こえてくるようなことも薫にとつて気味の悪いはじめての経験であつた。「さののわたりに家もあ

らなくに」(わりなくも降りくる雨が三輪が崎^{さき})などと口ずさみながら、田舎^{いなか}めいた縁の端にいたのであった。

さしとむるむぐらやしげき東屋^{あづまや}のあまりほどふる雨そそぎかな

と言ひ、雨を払うために振った袖の追い風のかんばしさには、東国の荒武者どもも驚いたに違いない。

室内へ案内することをいろいろに言つて望まれた家の人は、断わりようがなくて南の縁に付いた座敷へ席を作つて薫^{かおる}は招じられ

た。姫君は話すために出ることを承知しなかったが、女房らが押し出すようにして客の座へ近づかせた。遣戸やりどというものをしめ、声の通うだけの隙すきがあけてある所で、

「飛驒ひだの匠たくみが恨めしくなる隔てですね。よその家でこんな板の戸の外にすわることなどはまだ私の経験しないことだから苦しく思われます」

などと訴えていた薫は、どんなにしたのか姫君の居室いままのほうへは行ってしまった。

人型ひとがたとしてほしかったことなどは言わず、ただ宇治で思いがけぬ隙間すきまからのぞいた時から恋しい人になったことを言い、これが

宿縁というものが怪しいまで心が惹かれていた。可憐なおおような姫君に薫は期待のはずれた気はせず深い愛を覚えた。

そのうち夜は明けていくようであつたが、鶏などは鳴かず、大通りに近い家であつたから、通行する者がだらしない声で、何かとか、有る名でないような名を呼び合つて何人もの行く物音がするのであつた。こんな未明の街で見える行商人などというものは、頭へ物を載せているのが鬼のようであると言いたが、そうした者が通つて行くらしいと、泊まり馴れない小家に寝た薫はおもしろくも思つた。宿直した侍も門をあけて出て行く音がした。ま

た夜番をした者などが部屋へ寝にはいったらしい音を聞いてから、薫は人を呼んで車を妻戸の所へ寄せさせた。そして姫君を抱いて乗せた。家の人たちはだれも皆結婚の翌朝のこうしたことをあつけないように言つて騒ぎ、

「それに結婚に悪い月の九月でしょう。心配でなりません、どうしたことでしょう」

とも言つたのを、弁は氣の毒に思い、

「すぐおつれになるなどとは意外なことに違いありませんが、殿様にはお考えがあることでしょう。心配などはしないほうがいいですよ。九月でも明日が節分になっていますから」

と慰めていた。この日は十三日であつた。尼は、

「今度はごいっしょにまいらないことにいたしましょう。二条の院の奥様が私のまいったことをお聞きになることもあるでしょうから、伺わないわけにはまいりません。そつと来てそつと歸つたなどとお思われましても義理が立ちません」

と言ひ、同行をしようとしないのであつたが、すぐに中の君に今度のことを聞かれるのも心恥ずかしいことに薰は思ひ、

「それはまたあとでお目にかかつてお詫^わびをすればいいではありませんか。あちらへ行つて知っている者がそばにいないでは心細い所ですからね。ぜひおいでなさい」

と薫はいつしよにここを出ていくように勧めた。そして、

「だれがお付きが一人来られますか」

と言ったので、姫君の始終そばにいる侍従という女房が行くことになり、尼君はそれといっしよにばいじょう陪乗した。姫君の乳母めのとや、尼の供をして来た童女なども取り残されて茫然ぼうぜんとしていた。

近いどこかの場所へ行くことかと侍従などは思っていたが、宇治へ車は向かっているのであった。途中で付け変える牛の用意も薫はさせてあった。河原を過ぎてほうしようじ法性寺のあたりを行くころに夜は明け放れた。若い侍従はほのかに宇治で見かけた時から美貌びぼうな薫に好意を持っていたのであるから、だれが見て何と言おうとも

意に介しない覚悟ができていた。姫君ははなはだしい衝動を受けたあとで、失心したようにうつ伏しになっていたのを、

「石の多い所は、そうしていれば苦しいものですよ」

と言ひ、薫は途中から抱きかかえた。薄物の細長を中に掛けて隔ては作ってあつたが、はなやかに出た朝日の光に前方も後方もあらわに見えるようになってからは、弁は自身の尼姿が恥じられるとともに、薫を良人^{おっと}として大姫君のいで立つて行く^{おつと}こうした供をする日を期していたにもかかわらず、その女王^{によおう}は亡くな^なってしまい、長生きをした咎^{とが}に意外な姫君と薫の同車する片端にいることになったと思われることで悲しくなり、隠そうとするのである

が悲しい表情の現われて、泣きもするのを侍従は憎らしがった。
縁起を祝う結婚の初めに、尼姿で同車して来たのさえ不都合であるのに、涙目まで見せるではないかと蔑さげすんだ。弁の感情がどう細かに動いているかも知らず、老人は泣き虫であるからしかたがないと思うからである。薫も姫君を愛すべき人とは見ているのであるが、秋の空の気配けはいにも昔の恋しさがつのり山を深く行くに従って霧が立ち渡っているように視野をさえぎる涙を覚えた。外をながめながら後ろの板へよりかかっていた薫の重なった袖そでが、長く外へ出ている、川霧に濡ぬれ、紅あかい下の単衣ひとえの上へ、直衣のうしの縹あざぎの色がべったり染まったのを、車の落とし掛けの所に見つけて薫は中

へ引き入れた。

かたみぞと見るにつけても朝霧の所せきまで濡るる袖かな

この歌を心にもなく薫が口に出したのを聞いていて尼は袖を絞るほどにも涙で濡らしていた。若い侍従は奇怪な現象である、うれしいはずの晴れの旅ではないかと不快がっていた。おさえ切れぬらしい弁の忍び泣きの声を聞いていて、自身も涙をすすり上げた薫は、新婦がどう思うことであろうと心苦しくなつて、

「長い間この路みちを通つて行ったものだと思つと、なんということ

なしに身にしむものが覚えられますよ。少し起き上がってこの辺の山の景色けしきなども御覧なさい。あまりに引っ込んでばかりいるではありませんか」

と、慰めるように言って、しいて身体からだを起こさせると、姫君は美しい形に扇で顔をさし隠しながら、恥ずかしそうにあたりを見まわした目つきなどは総角あげまきの姫君を思い出させるのに十分であったが、おおように過ぎてたよりないところがこの人にはあって、あぶなっかしい気がされなくもなかった。若々しくはありながら自己を護まもる用意の備わった人であったのをこれに比べて思うことによつて、昔を思う薫の悲しみは大空をさえもうずめるほどのもの

のになった。

山莊へ着いた時に薰は、その人でない新婦を伴つて来たことを、この家にとまっているかもしれぬ故人の靈に恥じたが、こんなふうには体面も思わぬような恋をすることになったのはだれのためでもない、昔が忘れられないからではないかなどと思い続けて、家へはいつてからは新婦をいたわる心でしばらく離れていた。女は母がどう思うであろうと歎かわしい心を、えん 艶な風采ふうさいの人からしんみりと愛をささやかれることに慰めて車から下りて来たのであった。

尼君は主人たちの寢殿の戸口へは下りずに、別な廊のほうへ車

をまわさせて下りたのを、それほど正式にせずともよい山荘ではないかと薫は思ったのであった。莊園のほうからは例のように人がたくさん来た。薫の食事はそちらから運ばれ、姫君のは弁の尼が調じて出した。山中の途は陰気であつたが山荘のながめは晴れ晴れしかつた。自然の川をも山をも巧みに取り扱った新しい庭園をながめて、昨日までの仮住居の退屈さが慰められる姫君であつたが、どう自分を待遇しようとする大将なのであろうとその点が不安でならなかつた。薫は京へ手紙を書いていた。

未完成でした仏堂の装飾などについて、いろいろ指図を要することがありまして、昨夜はそれに時を費やし、また今日はそれ

を備えつけるのに吉日でしたから、急に宇治へ出かけたのでした。ここまで来ますと疲れが出ましたのとともに、謹慎日であることに気がついたものですから、明日までずっと滞留することにしようと思います。

というような文意で、母宮へも、夫人の宮へも書かれたのである。

部屋着になって、直衣姿のうしの時よりもつと艶えんに見える薫のはいつて来たのを見ると、姫君は恥ずかしくなったが、顔を隠すこともできずそのままだった。母の夫人の作らせた美服をいろいろと重ねて着ているが、少し田舎風いなかなところが混じって見えるのに

も、昔の恋人が着古したものを着ながらも貴女らしい艶なところの多かったことの思い出される薫であつた。姫君の髪ぐしの裾すそはきわだつて品よく美しかった。女二の宮のお髪ぐしのすばらしさにも劣らないであろうと薫は思った。そんなことから、この人をどう取り扱うべきであろう、今すぐに妻の一人としてどこかの家へ迎えて住ませることは、世間から非難を受けることであろうし、そうかといつて他の侍妾じしやうらといつしよに女房並みに待遇しては自分の本意にそむくなどと思われて心を苦しめていたが、当分は山莊へこのまま隠しておこうと思うようになった。しかし始終逢うことができないでは物足らず寂しいであろうと考えられ、愛着の覚えら

れるままにこまやかに将来を誓いなどしてその日を暮らした。八の宮のことも話題にして、昔の話もこまごまと語って聞かせ、戯れもまた言ってみるのであったが、女はただ恥ずかしがってばかりいて、何も言わぬのを物足らず薫は思ったが、欠点らしくは見えなくても、こうしたたよりないところのあるのは、よく教育していけばよいのである、田舎風いなかに洒落しゃれたところができていて、品悪く蓮葉はすつばであれば、人型ひとがたもまた無用とするかもしれないのであると思ひ直しもした。山荘に備えつけてあった琴や十三絃げんを出させて、こうしたたしなみはましてないであろうと残念な気のする薫は一人で弾ひきながら、宮がお亡かくれになったのち、この家で楽器などと

いうものに久しく手を触れたことがなかったと、自身の爪音つまおとさえも珍しく思われ、なつかしい絃声を手探りで出し、目は昔の夢を見るように外へ注いでいるうちに、月も出てきた。宮の琴の音は、音量の豊かなものではなかったが、美しい声が出て身にしむところがあつたと思い、

「あなたが宮様もお姉様もおいでになったところに、ここで大人おとなになつていたら、あなたの価値はもっとりっぱになつていたでしょうね。宮様の御様子は子でない私でさえ始終恋しく思い出されるのですよ。どうしてあなたは遠い国などから長く帰れなかったのだらう」

薫のこう言うのを恥ずかしく聞いて、手で白い扇をもてあそびながら横たわっている姫君の顔色は、透くように白くて、えん艶な額髪あげまきの所などが総角の姫君をよく思い出させ、薫は心の惹ひかれるのを覚えた。ほかの教育はともかく、こうした音楽などは自分の手で教えて行きたいと薫は思い、

「こんなものを少しやってみたことがありますか。吾わが妻つまという琴などは弾いたでしょう」

などと問うてみた。

「そうしたやまと言葉も使い馴なれないのですもの、まして音楽などは」

姫君はこう答えた。機^き智^ちもありそうには見えた。この山荘に置いて、思いのままに来て逢うことのできないのを今すでに薫は苦痛と覚えるのは深く愛を感じているからなのであろう。楽器は向こうへ押しやって、「楚王台上夜琴声^{そわうだいじやうのよるのきんせい}」と薫が歌い出したのを、姫君の上に描いていた美しい夢が現実のことになったように侍従は聞いて思っていた。その詩は前の句に「斑女閨中秋扇色^{はんによけいちゆうしゅうせんいろ}」という女の悲しい故事の言われてあることも知らない無学さからであつたのであろう。悪いものを口にしたと薫はあとで思った。

尼君のほうから菓子などが運ばれてきた。箱の蓋^{ふた}へ楓^{かえで}や蔦^{つた}の紅^{もみ}葉^じを敷いてみやびやかに菓子の盛られてある下の紙に、書いてあ

る字が明るい月光で目についたのを、よく読もうと顔を寄せているのが、食欲が急に起こったように他からは見えておかしかった。

やどり木は色変はりぬる秋なれど昔おぼえて澄める月かな

と古風に書かれてある歌の心に、薫は羞恥しゆうちを覚え、哀れも感じて、

里の名も昔ながらに見し人の面おもがはりせる閨ねやの月かげ

返事ともなくこう口ずさんでいたのを、侍従が弁の尼へ伝えた
そうである。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
